

## 第四十六章

泡鳴の作は、明治大正の作品を議する上に、是非とも批評しなければならぬものであった。

かれの全集の中では、小説よりも評論よりも、口語体の詩が一番深く私の心を惹いたが——ことに、樺太時代のものが何とも言われない悲痛な感じを私に誘ったが、かれに取っては、詩よりも評論よりも小説を読んで貰う方が一番本意であったには相違なかった。

しかし、ここで少し詩のことを言わせて貰いたいと私は思う。何故と言うのに、かれの詩は比較的世間に読まれていないからである。非常にすぐれたものを持っているに拘らず、人があまりにそれを言わないからである。

それは詩だって、小説だって、読者には明るいロマンチックなものの方が好いには違ひはない。のんきな、静かな、あまいものが好いに相違ない。従ってどうしても口あたりの好いものは売れる。人気もある。しかし、そのために、本当のものが読まれないのは、悲しいことだ。

島崎君の『若葉集』なども、新しい芽としては立派なものであると言って好いであろう。いろいろなものがあれから出たとも言えるであろう。また北原白秋の『思ひ出』などもすぐれた詩集のひとつとは言えるだろう。しかし今日から見れば、そうしたものはすべてあまいものであることは争うことの出来ない事実であった。その作者自身でさえ、決して好いとは思っていないに相違ないのであった。それはあの時代の小説が古くって読めないように、あの詩も若いセンチメンタルなものであった。それに比べると、樺太で詠んだかれの口語詩の方が、どんなに本場で、またどんなに悲痛で、またどんなに技巧に富んでいたか知れなかった。あの海のほとりで落日を眺めている詩などは、日本の新しい詩壇でも沢山はあるまいと思われるほどそれほどすぐれたものだった。

否、そればかりではなかった。口語体の詩の発達もかれに負うところが非常に多かった。一体口語詩といふものは、川路柳虹が始めたということであるけれども、それを今日のように打ち立てるためには泡鳴などもその元勳のひとりであらねばならなかった。それに、その内容がすぐれていた。当時のあらゆる詩人から群を抜いていた。かれのいわゆる『悲痛の哲理』が心とも感情ともなつて動いていた。決して若いセンチメンタルな心ではなかった。

何のために、僕

樺太へ来たのか わからない。

鱧の罐詰、何だ、それが？

酒と女、これも何だ？

東京を去り、友達に遠ざかり、

愛婦と 離れ、文学的努力を忘れ、

握り得たのは金でもない。

たゞ 僕 自身の力、

これが 思ふやうに 動いて ゐない夕べには、

単調子な 樺太の 海へ

僕の 身も、腸わたも、投げて、しまひたくなる

これなどことにその時の心を、苦しみを語ったものの一つと言うことが出来た。泡鳴はあの頃が一番好かった。あの頃が一番真面目な苦しみと悶えと精進とを持っていた。かれはその時代の世界苦を一番多く代表して持っていたということが出来た。

小説においては、かれは長い間不遇であった。かれは余程後になってまでも、原稿を持って雑誌記者のもとへ行く閲歴を持っていた。それはその作が暗くじみなものであったためであろうし、また度々細君を取り換えたりして世間からわるく思われていたためでもあったであろうが、一面かれの作がそう大して旨くなかったこともその原因のひとつであったには相違なかった。かれは白鳥や秋声や藤村に比して、その書いてあることは面白いにしても、その技巧において著しく劣っていた。いやに長たらしくもあれば、ごたごた混雑してもいた。退屈でもあった。

しかも、その長たらしさが、退屈さが、わる細かい描写が次第に一種のスタイルを成して、立派な作品を成すに至ったのは、その晩年四五年の間のことで、『毒薬を飲む女』『憑物』あたりから次第に世間にも認められるようになったのであるのに――これから立派なものも出来ようと思われたのに、不幸にして世を去ったのは、惜しんでも猶あまりあることであつた。

かれも晩年には、自分のことではなしに、他人のことを書いて見ようと思ひ立つたらしかった。小説家である以上、他人のことも自分のように書けなければ駄目だ。こうかれも思ひ立つた。しかしそれはどれだけ成功したか。矢張、自分のことのように他人は書けなかつたのではなかつたか。どうしても真に迫る度数が少なくなつて、影が薄いようなものになりはしなかつたか。

かれの作を読むには、是非ともかれの実生活を知らなければならなかつた。前にも少し言つたと思うが、かれは勇者であり、楽道家であり、自我主義者であり、また堅固な、容易に殻を破ることの出来ない自信家であつた。凡そ芸術家と言へば、誰でも我儘なもので、自分の好いと思うことは決して捨てないものであるが、それは藤村でも秋声でも白鳥でも抱月でもすべて同じであるが、その我儘な態度について、また銘々違つたとこ

ろのあるのも面白かった。藤村はああいう人だけに黙ってはいるけれども、決して他に雷同しようなどとはしなかった。秋声は自分の言ったことは飽までも飽までも把持した。決してそれを捨てようとはしなかった。泡鳴はそれに比べると、いくらかわかりが好いようなところがあつたけれども――面と向かえば、さうだ、さうだ！　なんて簡単に點頭して了解してしまうようなところがあつたけれども、しかも弁難駁撃には、決して自分が間違っているとは言わなかった。現に間違っているのがわかっていても、それを何とか彼とか言つて弥縫した。ところが、唯一度、小説の中に、「薑の入つてゐるまぐろの鮓」ということを書いて、それを指摘されて、それは薑じゃあるまい、わさびだろうと言われた時には、流石の彼もへこたれた。

かれの一元描写論は、ややゆとりのないもので、あれでは、描写上不便で仕方があるまいと思われるけれども、しかし大体においては正しかった。理想としては、是非あゝいう風にならなければならぬものであつた。すぐれた芸術家は、昔から皆なああした態度であつた。フローベルの『ボヴァリイ夫人』などでも、根本においては、一元描写であるということが出来た。唯、かれの言うように、枝葉をすっかり伐つてしまわなかつたばかりである。

泡鳴と白鳥と秋声とは、何処か似たところがあつた。それに、平生の交際においても互いに仲が好いらしかった。或はそうした形において互いに影響し合つたのかも知れなかつた。しかし、子細に細かく入つて行けば、三人は三人とも皆違つていた。他についての描写では、白鳥が一番巧みであつたけれども、前に言つたように、何処か信じ切れないようなところがあるに比して、泡鳴は一番下手で、すぐその内兜を見透かされるようなところがあつたけれども、何処か本当のところがあるような気がした。それに比して、秋声は好い頭を持っていた。かれはお話を聞いただけでも、すぐその物の核心に入つて行くことが出来た。『あらくれ』などは、中でもことにすぐれた作であつた。

※本文の表記は、常用漢字・新かな遣いに改めた。

※出典『近代の小説』第四十六章 大正12年2月18日